

令和 2 年 4 月 28 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02986

研究課題名(和文) 自律した英語学習者の統合的理解に基づいた学習支援とその有効性検証

研究課題名(英文) Profiling and supporting learner autonomy development through an integrated understanding of autonomous language learners

研究代表者

廣森 友人 (Hiromori, Tomohito)

明治大学・国際日本学部・専任教授

研究者番号：30448378

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：英語教育の大きな目的の1つは、「自律した学習者」の育成である。しかし、どのように学習者の自律を測定・評価するかについては、実証的な検討が必ずしも十分ではない。本研究の目的は、学習者が自律的に英語学習に取り組み、成果を上げるメカニズムを理論実証的に解明することである。具体的には、(1)3つの異なる観点から自律した学習者を測定・評価する「自律性診断基準尺度」の開発とその妥当性を検証し、(2)実際に教育介入を伴う調査等を通じて、自律的に英語学習に取り組み成果を上げる学習者をいくつかの観点から統合的に捉え、学習者の特性に基づいた新たな学習支援のあり方について検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究の結果、学習者の自律性が発達・変化するプロセスにはいくつかのパターンがあること、別の言い方をすれば、学習者の自律性を高めるためのフィードバックの効果には個人差があること、さらに自律性が変化・発達するには学習内容に対する認識が重要な役割を果たしていることが明らかとなった。学習内容に着目した研究・実践を行うことにより、実際の学習や指導に対して、これまで以上に具体的な示唆やアドバイスが可能になるものと期待される。

研究成果の概要(英文)：Learner autonomy in second/foreign language learning has been intensely investigated for decades. However, despite several practical studies on fostering autonomy, very little has been researched or published on “measuring” autonomy empirically. This study therefore has a two-fold objective: (1) to develop and validate an instrument (Autonomy Diagnosis Scale: ADS) to measure multidimensional aspects of autonomy (Study 1 and 2), and (2) to investigate developmental changes in learners’ autonomy profiles employing the instrument developed in the previous studies (Study 3). The results concluded that practitioners might consider devoting additional attention to improving learning content to enable students assume more responsibility for their learning.

研究分野：応用言語学，第二言語習得研究

キーワード：第二言語習得 自律学習 動機づけ 学習方略 学習内容 個人差

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

英語教育の大きな目的の1つとして、「自律した学習者」(autonomous learner)の育成を目指すことに異論をはさむ余地はない。英語を含めた外国語の習得にはそもそも長い時間がかかるものであり、学校教育を超えて生涯にわたって学び続ける態度を育てるためには、自律学習の視点が大きい役立つ。さらに近年、海外において広く注目されている「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR)やそれに準拠して開発された「英語能力到達度指標」(CEFR-J)においても、自律した学習者の考え方が色濃く反映されている。では、このような社会的、あるいは学問的関心の高まりが見られる自律学習という概念に対して、私たちは具体的なイメージを共有できているだろうか。例えば、自律した学習者を目指す、あるいは育てるといった場合、そもそも自律学習とは何かといった理解が不可欠なはずである。

### 2. 研究の目的

本研究では上記のような問題意識のもと、自律学習の先導的研究者である Phil Benson の枠組み (Benson, 2001, 2011) を参考とし、学習者が自律的に英語学習に取り組み、成果を上げるメカニズムを理論実証的に解明することを試みる。そこでは自律した英語学習者を3つの観点(動機づけ、学習方略、学習内容)から統合的に捉えることにより、自律の発達プロセスをより立体的・全体的に理解することを目指す。このような目的を達成するために、本研究では以下、3つの調査を実施した。すなわち、(1) 3つの異なる観点から自律した学習者を測定・評価する「自律性診断基準尺度」の開発、(2) 先に開発した尺度の妥当性(基準関連妥当性)の検証、(3) 尺度を用いた教育実践的介入とその効果検証、である。以下では、各調査の概要について順に説明・報告する。

### 3. 研究の方法

#### 3.1 調査1

##### (1) 研究目的

3つの異なる観点(動機づけ、学習方略、学習内容)から自律した学習者を測定・評価する「自律性診断基準尺度」を開発する。

##### (2) 調査協力者ならびに調査手続き

調査協力者は関東近郊の私立校普通科に通う高校1, 2年生(計118名; 男子68名, 女子50名)であり、協力者による質問紙尺度への回答は、各教室内で集団的に実施された。

##### (3) 質問紙

質問紙尺度の作成に当たって、動機づけ(16項目)、学習方略(12項目)についてはこれまでに発表されている先行研究を参考とし(例: Dörnyei, 2001; Hiromori, 2009; JACET 学習ストラテジー研究会, 2006; Oxford, 2011)、学習内容(8項目)については適切な先行研究が存在しなかったため、本研究用に新たに用意した。なお、評定は7件法で回答を求めるように作成した。

##### (4) 分析方法

分析に当たっては、記述統計量の算出や探索的因子分析などには IBM SPSS Statistics 22、検証的因子分析には IBM SPSS Amos 20 をそれぞれ用いた。

#### 3.2 調査2

##### (1) 研究目的

調査1で開発した「自律性診断基準尺度」の妥当性(基準関連妥当性)の検証を通じて、当該尺度の精緻化を図る。

##### (2) 調査協力者ならびに調査手続き

調査協力者は、調査1と同じ関東近郊の私立校普通科に通う高校1, 2年生(計118名; 男子68名, 女子50名)であった。なお、調査1と調査2は別の時期に各教室内で集団的に実施された。

##### (3) 質問紙

調査1を通じて、当初、合計36項目あった質問紙尺度から、学習方略2項目、学習内容2項目を削除した計32項目の尺度を用いた。なお、評定は調査1と同じく、7件法で回答を求めた。

##### (4) 分析方法

調査2では、先に開発した尺度の妥当性検証を行った。妥当性にはいくつかの概念が含まれるが、調査1では先行研究の体系的な調査・検討を通じて内容的妥当性、さらに探索的・検証的因子分析の実施を通じて構成概念妥当性についてある程度確認できたことを踏まえ、ここでは基準関連妥当性の検証を行った。

具体的に、本調査では授業外での自主学習時間、ならびに学力を外部基準の指標として取り上げた。すなわち、自律性の程度が高ければ高いほど、授業外で自主的に学習する傾向が高くなり、結果として学力(本調査の場合、英語力)も向上すると仮説を立てた。そこで、尺度によって得

られる自律性の各指標と自主的な学習時間（一週間当たりの授業外での平均学習時間）、英語力（「1 全く得意ではないと思う」から「5 とても得意な方だと思う」の5段階評定を用いた自己評価）の間には正の相関が見られるかどうかを検証した。

### 3. 3 調査3

#### (1) 研究目的

調査1, 調査2 で得られた成果を踏まえ、調査3 では実際に教育介入を伴う実践研究を通じて、自律的に英語学習に取り組み成果を上げる学習者をいくつかの観点から統合的に捉え、学習者の特性に基づいた新たな学習支援のあり方について検討する。

#### (2) 調査協力者ならびに調査手続き

調査協力者は、調査1, 調査2 に参加した協力者とは異なる、都内の私立校普通科に通う高校1年生（計10名；男子4名、女子6名）であった。教育介入に先立ち、調査への参加・協力は任意であること、調査結果（研究論文など）から個人が特定されることはないこと、また学校での成績には一切関係しないことなどが説明された。

#### (3) 質問紙、フィードバック表

調査1, 調査2 を通じて開発した質問紙尺度「自律性診断基準尺度」を用いた。尺度の内容は、動機づけ（16項目）、学習方略（10項目）、学習内容（6項目）、計32項目から構成された。なお、評定は調査1, 調査2 と同様、7件法で回答を求めるようにした。

調査3 では上記に加え、質問紙尺度への回答結果に基づいたフィードバック表を作成した。フィードバック表は教育介入前（プレテスト）の質問紙尺度による診断結果に基づき、個々の調査協力者向けに作成し、教員による口頭での簡単な説明（フィードバック表の見方）とともに配布した。フィードバックの内容は、自律学習の3観点（動機づけ、学習方略、学習内容）から、個人の結果と協力者全体の平均を比較し、「あなたの長所」、「あなたの短所（改善点）」という形でまとめた。また長所・短所に加え、短所を改善するためにはどうすれば良いのかということにも言及し、口頭での説明時には書かれていることを意識して今後の学習に取り組むように指示した。

#### (4) 調査手順

調査は教育介入前後の2時点の変化を比較・検討するプレ・ポストデザインを採用した。プレテストとポストテストは、調査協力者のクラス担任がホームルーム内に実施した（所要時間は約10分間）。フィードバックは個別面談の形式で、1人につき5分程度で行った。また、ポストテストの結果、顕著な変化を見せた2名の参加者に対しては、個別にインタビュー調査を実施した。

#### (5) 分析方法

調査3 では、はじめに教育介入前後のプレテスト、ポストテストそれぞれにおける結果の全体傾向を把握した。続けて、類似した自律的特性を示した学習者群をプロファイリングし、それぞれのグループの3観点の状況を検討した。具体的な分析方法としては、クラスター分析を利用した。

クラスター分析とは、お互いに似ているもの同士を1つのかたまり（cluster）にまとめ、グループ化することを可能にする統計的手法である（Aldenderfer & Blashfield, 1984）。例えば、図1に見られるように、学習者の中には動機づけ、学習方略、学習内容ともにバランスよく発達させている学習者もいれば、それとは異なったパターンで成果を上げている学習者（あるいは思ったような成果を上げられていない学習者）がいるはずである。

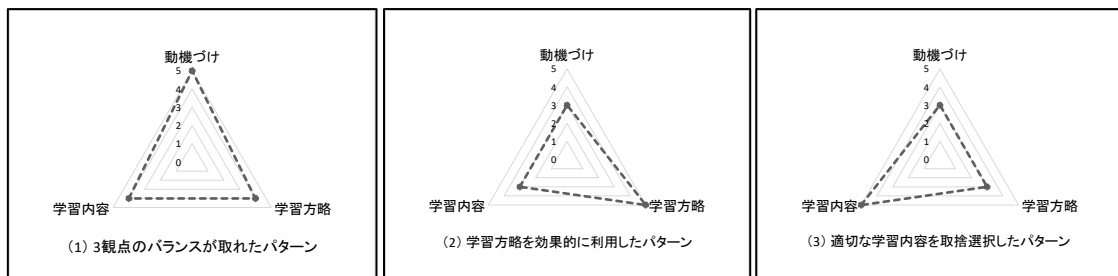


図1: 自律した学習者に見られるいくつかのパターン（概念的なイメージ図）

本研究では、クラスター分析の手法を用い、多様なパターンから学習者像を捉えるとともに、彼らの特徴的な発達・変化を明らかにする。その中で、とくに自律性の発達が確認された2名の学習者に対してはインタビューを行い、なぜ、どのようにその協力者が自律性を高めたのかについて検討する。

## 4. 研究成果

### 4. 1 調査1

分析の結果から得られた各尺度項目の平均、標準偏差、 $\alpha$ 係数、ならびに検証的因子分析の結果（因子間相関）を簡潔にまとめたものを表1に示す。

表1: 「自律性診断基準尺度」における平均、標準偏差、 $\alpha$ 係数

質問項目例	平均	標準偏差	$\alpha$ 係数
第1因子: 動機づけ (計16項目)	4.07	0.86	.87
例1: 取り組んでいる課題と関係のないことは忘れるようにする。			
例2: 自分なら出来るはずだと言いつつ聞かせながら勉強している。			
第2因子: 学習方略 (計10項目)	4.04	1.09	.89
例1: 学習開始時には、まず目標を設定する。			
例2: 用いた学習方法は適切だったか評価する。			
第3因子: 学習内容 (計6項目)	4.01	1.33	.93
例1: 自分に合った学習内容(例: 問題集, 参考書)で勉強している。			
例2: どんなことを勉強したいか、はっきりとした意見を持っている。			
因子間相関	第1	第2	第3
第1因子 (動機づけ)	—		
第2因子 (学習方略)	.71**	—	
第3因子 (学習内容)	.68**	.79**	—

各下位尺度の信頼性係数 ( $\alpha$ 係数) は.87~.93, 適合度指標はGFI = .998, AGFI = .987, CFI = 1.000, RMSEA = .000 であり, モデルはデータを十分に説明していることが確認された。

#### 4. 2 調査2

##### (1) 自主的な学習時間

学習時間の長さの平均、標準偏差を基準に、学習者を下位群 ( $n = 38$ ), 中位群 ( $n = 46$ ), 上位群 ( $n = 34$ ) に分類した。分類結果の妥当性を検証するに当たっては、一元配置の分散分析を実施した ( $F(2, 115) = 176.73, p = .00$ )。図2は学習時間の下位群 (0時間; 38名), 中位群 (0.5~1時間; 46名), 上位群 (2~7時間; 34名) それぞれにおける自律性の程度をまとめたものである。図から明らかなように、自主的な学習時間が長くなればなるほど、自律性の程度も高くなることが確認できる。

##### (2) 英語力

上記に倣い、英語力についても同様の分析を行った。英語力の自己評定の平均、標準偏差を基準に、学習者を下位群 ( $n = 61$ ), 中位群 ( $n = 25$ ), 上位群 ( $n = 32$ ) に分類した。分類結果の妥当性を検証するに当たっては、一元配置の分散分析を実施した ( $F(2, 115) = 428.96, p = .00$ )。図3は、英語力の下位群 (1, あるいは2; 61名), 中位群 (3; 25名), 上位群 (4, あるいは5; 32名) それぞれにおける自律性の程度をまとめたものである。図から明らかなように、英語力の自己評定に比例して自律性の程度も高くなることが確認できる。

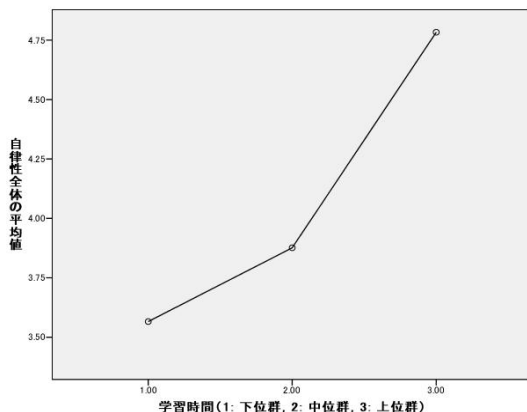


図2: 自主的な学習時間と自律性の関係

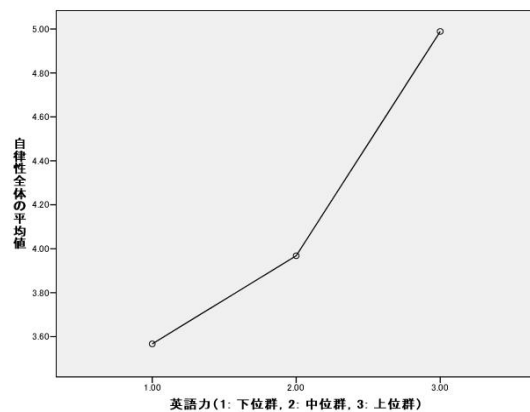


図3: 英語力と自律性の関係

以上の結果から、自律性の程度が高ければ高いほど、授業外で自主的に学習する傾向が高くなり、結果として学力（本調査の場合、英語力）も向上するという仮説はいずれも支持された。すなわち、「自律性診断基準尺度」は学習者の自律性の高さを測定・評価する上で十分な妥当性を持った尺度であると考えられる。以下に続く調査3では、実際に教育実践的介入を伴う調査を通じて、このことを実証的に検討していく。

#### 4. 3 調査3

##### (1) 全体傾向に焦点を当てた分析

教育介入の前後、すなわち、プレテスト（教育介入前）とポストテスト（教育介入後）における各下位尺度平均の変化を調べたところ、いずれの下位尺度ともごくわずかな上昇傾向が見られたものの、統計的に有意な変化は見られなかった（動機づけ:  $t = -0.28$ ,  $p = .79$ , 学習方略:  $t = -0.68$ ,  $p = .51$ , 学習内容:  $t = -0.10$ ,  $p = .92$ ）。

##### (2) 個人差に焦点を当てた分析

つぎに、自律傾向の異なる学習者群に対する介入効果を検証するために、プレテスト、ポストテストの結果を用いて、クラスター分析（平方ユークリッド距離、ウォード法）を実施した。その結果、調査3の協力者である高校1年生10名は、プレテスト、ポストテストともに自律傾向の異なる3つのクラスター（グループ）に分けるのが適当と判断された。クラスター分析によって得られた結果の妥当性を検討するに当たっては、各下位尺度において一元配置の分散分析を行った。その結果、すべてのクラスター間に統計的に有意な差があることが示された。

ここで、自律の3要因ごとの傾向を、平均に基づき便宜上、L(ow)（平均1~3: 3は含まない）、M(edium)（平均3~5: 5は含まない）、H(igh)（平均5~7）で表すと、介入前（Initial Profiles）と介入後（Final Profiles）の各協力者は以下のように特徴づけられる。

表2: 個々の対象者における介入前後の変化のまとめ

対象者 ID	介入前		介入後	変化の概要
1	MMM	→	MML	下降（学習内容）
2	MMM	→	MMM	維持
3	MMH	→	MMM	下降（学習内容）
4	LLL	→	MMM	上昇（全般）
5	MMH	→	MMM	下降（学習内容）
6	MMM	→	MMM	維持
7	MMM	→	MMM	維持
8	MMH	→	MML	下降（学習内容）
9	MMM	→	MMM	維持
10	MMM	→	HHH	上昇（全般）

教育介入前には、自律性のどの観点も平均3未満であった学習者（LLL）が1名見られた（各下位尺度の平均は動機づけ2.19, 学習方略1.25, 学習内容1.75）。また、3要因がそれぞれ平均3~5のレンジにあった学習者（MMM）が6名、動機づけと学習方略は平均3~5, 学習内容の平均は5~7のレンジにあった学習者（MMH）が1名いた。介入後には、3要因がそれぞれ平均5~7であった学習者1名（HHH）、それぞれ平均3~5であった学習者7名（MMM）、動機づけと学習方略は平均3~5, 学習内容の平均は1~3のレンジにあった学習者（MML）が2名いた。

一般的に自律性の上昇が見られた2名の学習者（協力者4, 10）に対してはインタビュー調査を実施したところ、目標設定や動機づけなど「なぜ」(why) 学習するのかを考えることが、自分にとって「何を」(what) 勉強することが必要なのか、あるいは「どのように」(how) 学習すべきかを考えるきっかけとなることが示唆された。すなわち、学習者の自律性は3要因が相互に関連し合いながら統合的に高まるものだと考えられる。このことは、調査1において、3要因の間に強い相関 ( $r = .68 \sim .79$ ) が見られたことにも通じるものである。

Benson (2001, 2011) は自律を「自らの学習をコントロールする能力」とし、そのコントロールする対象として3要因（動機づけ、学習方略、学習内容）を挙げているが、なかでも、自ら学習内容をコントロールする力を「学習における自律の根本的な要素」(fundamental to autonomy in learning) と位置づけている (Benson, 2011, p. 112)。一方、現状の自律学習研究はそのような主張と乖離している。これまでの主要な研究では、例えば動機づけや学習方略に焦点を当て、効果的な外国語学習・指導への示唆を得ようとしてきた。その際、学習者が学ぶ素材・教材（すなわち学習内容）はどちらかと言えば外的な要因として扱われてきた。しかし、これまで見てきたように、実際の教室場面では学習内容と動機づけ、学習方略は密接に関連した相互作用的なものであり、一方を他方から切り離して考えることはできない。例えば、対象となる学習内容にマッチした学習方法、その学習素材・教材の特性に見合った学習方略というものがあるはずであり、学習者は何もない状態で学習方略を選択・使用しているわけではない。したがって、今後の研究では動機づけ、学習方略だけでなく、これまで以上に学習内容そのものにも目を向けていく必要がある。そうすることによって、実際の学習や指導に対して、より具体的な示唆やアドバイスが可能になるものと期待される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Tomohito Hiromori	4. 巻 51
2. 論文標題 Profiling and tracing learner autonomy development through an integrated understanding of autonomous language learners	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Taking Risks in Applied Linguistics: Proceedings of the 51st Annual Meeting of the British Association for Applied Linguistics	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣森友人	4. 巻 84
2. 論文標題 英語学習者のプロファイリングを利用した自律学習支援に関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 125-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村征洋・廣森友人・桐村亮・仁科恭徳	4. 巻 21
2. 論文標題 英語ドラマ制作によるプロジェクト型協同学習が学習者の心理的側面に与える影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JACET Kansai Journal	6. 最初と最後の頁 23-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣森友人	4. 巻 6
2. 論文標題 やる気は伝染する!? ペア/グループワークにおける動機づけ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro Yoshimura, Tomohito Hiromori, Ryo Kirimura, and Yasunori Nishina	4. 巻 30
2. 論文標題 Motivating EFL students through the use of project-based cooperative learning	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ThaitESOL Journal	6. 最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 根岸雅史・廣森友人・他	4. 巻 36
2. 論文標題 学習意欲を高める指導とは	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Teaching English Now	6. 最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計14件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 Akiko Okunuki・Tomohito Hiromori
2. 発表標題 Promoting secondary school learner autonomy by using portfolios
3. 学会等名 The TESL Ontario's 47th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masahiro Yoshimura・Tomohito Hiromori・Ryo Kirimura
2. 発表標題 Examining how individual EFL students in a group have changed during a project-based film-making activity: From the perspective of cooperative learning theory
3. 学会等名 Online Learning 2019: Global Summit & EdTech Expo (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryo Kirimura・Tomohito Hiromori・Masahiro Yoshimura
2. 発表標題 Motivational effects of smartphone-enabled video recording on speaking activities in EFL courses
3. 学会等名 The World Congress on Education (WCE-2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masahiro Yoshimura・Ryo Kirimura・Yasunori Nishina・Tomohito Hiromori
2. 発表標題 Motivating EFL students with project- based film-making activity: The cooperative learning theory viewpoint
3. 学会等名 The Annual Conference of American Association of Applied Linguistics (AAAL 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣森友人
2. 発表標題 第二言語習得における動機づけのメカニズム
3. 学会等名 北海道英語教育学会 (HELES) 2018年度 (第19回) 研究大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 廣森友人・實諒人
2. 発表標題 日本人大学生の英語学習における動機減退・回復プロセス：TEAを用いた質的調査
3. 学会等名 全国英語教育学会 (JASELE) 第44回京都研究大会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 吉村征洋・廣森友人・桐村亮・仁科恭徳
2. 発表標題 英語ドラマ制作を通じたプロジェクト型協同学習が学習者の心理的側面に与える影響
3. 学会等名 大学英語教育学会 (JACET) 第57回国際大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masahiro Yoshimura・Tomohito Hiromori・Ryo Kirimura・Yasunori Nishina
2. 発表標題 The motivational effects of project-based film-making activity through cooperative learning in Japanese university
3. 学会等名 The 10th International Conference on Language, Innovation, Culture, and Education (ICLICE) 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomohito Hiromori
2. 発表標題 Profiling and tracing learner autonomy development through an integrated understanding of autonomous language learners
3. 学会等名 The 51st annual meeting of the British Association of Applied Linguistics (BAAL) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomohito Hiromori
2. 発表標題 The effects of task repetition on the development of L2 speech production: A Dynamic Systems Theory perspective
3. 学会等名 The 16th Annual Hawaii International Conference on Education 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomohito Hiromori
2. 発表標題 Mechanisms for learning a foreign language: Theory and practice from the perspective of second language acquisition research
3. 学会等名 The 14th International Conference on Japanese Language Education in Malaysia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 廣森友人
2. 発表標題 英語が学ばれるプロセスを意識してみよう！ 第二言語習得研究から見た効果的な英語学習のヒント
3. 学会等名 東海大学文学部「知のコスモス」講演会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 廣森友人
2. 発表標題 動機づけの変化・発達プロセスとコンテキスト
3. 学会等名 外国語教育メディア学会 (LET) 第57回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 廣森友人
2. 発表標題 やる気は伝染する!? ペアやグループの動機づけから考える英語指導
3. 学会等名 関西英語教育学会2017年度 (第22回) 研究大会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 酒井英樹・廣森友人・吉田達弘	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 336
3. 書名 「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教育法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----